

新座歴史探訪—松永安左エ門（耳庵）の新座時代を中心に—

An Exploration into the History of Niiza
: Focusing on the Days of Yasuzaemon (Jian) Matsunaga in Niiza池間 里代子
Riyoko IKEMA

要旨

Yasuzaemon Matsunaga, called the King of Electric Power, exercised his ability as a businessman and a politician before World War II, exerting a significant influence on the electric power and energy industry in Japan. However, as people sensed a war approaching, he bided his time in and around Niiza, Saitama Prefecture, while devoting himself to the tea ceremony. After the war, he donated to the government the tea arbors and ceremonial tea utensils he had collected, and laid the foundations for the growth of the power industry and the construction of industrial roads and dams. This paper sheds light on the days of Yasuzaemon Matsunaga in Niiza to rediscover his achievements.

はじめに

本稿は平成27年度文部科学省COC事業（地（知）の拠点整備事業）で採択された「新座歴史探訪Ⅱ—荒ぶる詫び 松永耳庵—」及び平成28年7月9日日本で開催した公開講座「新座歴史探訪—松永耳庵の新座時代を中心に—」を下敷きに原稿化したものである。

松永安左エ門（1875-1971）は平成27年に生誕140年を迎え、終焉の地であった小田原では講演会・展示会などが盛んに行なわれ、NHKでは「経世済民の男」シリーズ第3弾としてドキュメンタリー番組が放映された。¹⁾しかし、松永安左エ門が第二次世界大戦中に所沢・志木・野火止など新座を中心とした地で雌伏し、戦後復興に大きな力を発揮したことについてはほとんど触れられていない。そこで、本稿では松永安左エ門の生涯を振り返り、新座時代が彼にとって重要な場所・時間であったことを検証していく。

松永安左エ門は「電力王」「電力の鬼」と呼ばれ、その軌跡は多くの書籍・記事になっているほか、本人の随想・随筆や自叙伝も残されている。それらの先行研究は本稿末の「参考文献」に挙げた。な

お、実業家としては「安左エ門」を、茶人としては「耳庵」と表記する。

1. 松永安左エ門の生涯²⁾

1-1. 幼年・青年時代

松永は明治8（1875）年12月1日、長崎県壱岐郡石田村印通寺の豪商に生まれ、幼名を亀之助といった。大変器量の良い跡取りに一家は大喜びしたという。明治22（1889）年に高等小学校を卒業し、家族の反対をハンガーストライキで押し切って15歳で慶應義塾に入学した。

慶應義塾時代は福沢諭吉の警咳に触れ、英語を学ぶなど学生生活を謳歌していたが、父の急死によって19歳で家督を継ぎ、三代目松永安左エ門を襲名した。家業は手広く商っていたが、酒造業を譲渡、呉服・海産を廃止し、缶詰製造所を設立した。後を弟に委ねて明治28（1895）年復学のため21歳で再上京した。

明治32（1899）年、福沢諭吉の養子桃介の勧めにより日本銀行へ入行することとし、「我人生は闘争なり」と福沢諭吉へ書き残し慶應義塾を中退、25歳だった。

1-2. 実業家時代

明治33（1900）年、福沢桃介と共同で丸三商店を開設し神戸支店長となるが4か月後に閉鎖する。以降明治の終わりにかけて、ゼネラルブローカー福松商会（石炭販売）、コークス事業、無煙炭硯経営、福博電気軌道、九州電気専務、博多伝統軌道専務、九州伝統鉄道常務などをつとめ、失敗や成功をしながら徐々にエネルギー方面の事業へと傾斜していった。この間明治37（1904）年に竹岡カズ（一子）と結婚をしている。

1-3. 政治家～電力会社時代

大正6（1917年）、43歳で福岡市選出衆議院議員に当選した。1期（4年）だけだが、実業界だけでなく政治の世界にも触れる事となった。政治家体験が私利私欲だけでなく「国家のため国民のため」に役立つ事業への情熱を掻き立てたと考えられる。この年に博多商業会議所会頭にも就任している。

大正10年（1921）年関西電気副社長に就任し、知多電気など近隣7社を合併した。

議員任期満了後は九州電灯鉄道を合併し、東邦電力として本社を東京に移転。

大正13（1924）年50歳で、超電力連携提案を基礎とする大日本送電株式会社創立案を発表した。翌年東京進出し東京電力を発足させ副社長に就任、昭和3（1928）年東京電灯取締役、東邦電力社長に就任する。

昭和4（1929）年東北電気を設立し社長に就任、昭和5（1939）年新潟電力社長・中部電力取締役に就任する。

昭和6（1931）年「電気日報」に五大電力統制に対し「東邦電力松永社長案」を発表した。

1-4. 雌伏時代

昭和15（1940）年、66歳の時に近衛首相らにより、大政翼賛会総裁や大蔵大臣に推挙されるが、公職を一切去るという信念の下断った。折しも戦争の足音が近づいており、松永安左エ門はそれに巻き込まれない方法として昭和9年頃より愛好していた茶道にのめり込む道を取った。その為に新座と所沢の境

(地番は所沢市大字坂の下437番だが、ほとんど新座市中野に接近している場所)に柳瀬荘を作り、野火止の平林寺前に睡足居(茶室)を建設して茶事三昧の生活を送る。年齢も60代後半に差しかかり、雌伏するには好都合だった。松永安左エ門は隠居ではなく雌伏であった。それは戦後になって「電力の鬼」³⁾と呼ばれたことから理解できる。

1-5. 戦後

昭和21(1946)年、柳瀬荘及び収集した古美術品を東京国立博物館に寄付することを決意する。松下亭(老樗荘)の建設を始め、小田原市板橋に転居する。

昭和24(1949)年、75歳で電気滋養再編審議員に就任する。各地域に発送配電一貫経営の民営電力会社を設立し、外資導入による電源開発を促進する目標を示す。これは現在の九電力体制の基礎を構築する基となった。

昭和26(1951)年、電気事業再編成の強行で「電力の鬼」と称される。

昭和28(1953)年、財団法人電力中央研究所理事長に就任する。

昭和30(1955)年、電力整備近代化調査委員会を設立、後の電気事業近代化計画委員会の基礎となった。

昭和31(1956)年、82歳で産業計画会議を組織して委員長に就任、以後14次にわたる勧告を発表した。松永安左エ門が提案して実現した事業には、東名高速道路・名神高速道路・沼田ダム計画・只見ダム計画がある。同年、歴史学者トインビーを老樗荘に招き茶会を行い、小泉信三・谷川徹三らが陪席した。

1-6. 晩年

昭和33(1958)年、財団法人超高压電力研究所を設立し理事長に就任。妻一子が死去する。

昭和34(1959)年、財団法人松永記念館を設立する。

昭和36(1961)年、87歳の時、産業計画会議第12次勧告で東京湾横断道路を提案する。

昭和38(1963)年、松永記念科学振興財団設立、名誉会長に就任した。

昭和39(1964)年、勲一等瑞宝章を受けるとも授賞式は欠席する。

昭和41(1966)年、トインビー博士の『歴史の研究』日本語版刊行会会長に就任する。

昭和43(1968)年、慶應義塾命名100周年記念式典で、名誉博士号を受ける。

昭和46(1971)年、産業計画会議、東南アジア経済協力会役員会に出席する。6月16日逝去、享年97歳。

以下に逝去する10年前に書かれた「遺言書」の抜粋を示す。

一つ、死後の計らいの事 何度も申し置く通り、死後一切の葬儀・法要はうずくの出るほど嫌いに
是れあり。墓碑一切、法要一切が不要。線香類も嫌い。

死んで勲章位階これはヘドが出る程に嫌いに候。

財産はセガレおよび遺族に一切くれてはいかぬ。彼らがダラクするだけです。

小田原邸宅、家、美術品、及び必要什器類は一切記念館に寄付する。これは何度も言った。

借金はないはずだ。戒名も要らぬ。以上、昭和36年12月8日

この遺言書を書いた翌年、米寿祝いで作った自作の狂歌を挙げて本人はこう言っている。

「生きながら鬼といはれりゃ死んだ後 仏となりてうめあはせせむ」これは…「鬼だからお前は容易に地獄へも極楽へも行けまい」という趣旨の歌を貰ったのに対するお返しだが、「一生働け」—簡単だが、これが私の心構えで、その気持ちを織り込んだつもりで戯れ歌である。⁴⁾

松永安左エ門は一貫して自分の信念を曲げない人物であった。福沢諭吉に憧れ上京を反対されるとハンガーストライキをする、戦後収集した茶室・茶道具をすっぱりと国へ寄付する、叙勲の際も「次の人が貰いづらくなるから」と説得されて受けたものの授賞式を欠席するなど、遺言書にもその精神が満ち満ちている。

2. 新座時代の松永安左エ門

2-1. 柳瀬荘およびその周辺

昭和4（1929）年所沢に柳瀬荘の造営を開始した。5,000坪を越える敷地内には武蔵の面影を今にとどめる雑木林も残され、周辺の開発から一線を画した貴重な自然環境を保っている。昭和23年3月に東京国立博物館へ寄贈され、現在は週に1回（木曜、無料）一般に公開されている。荘内の主要建物である「黄林閣（381㎡）」は江戸時代天保期の民家の特色をよく示すものとして昭和53（1978）年に重要文化財に指定された。荘内には他に書院造りの「斜月亭（151㎡）」や茶室「久木庵（17㎡）」などが残されている。⁵⁾

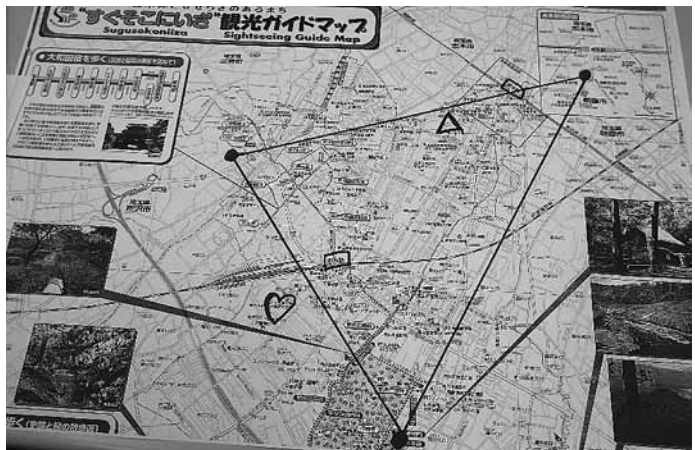
なお、後述するように新座市野火止の平林寺前に睡足居（茶室）を作り足繁く通ったが、幼時から馬術を嗜んでいたためにその移動は馬だったと古老から聞いた。⁶⁾

柳瀬荘～睡足居～慶應志木高校は1里圏内である。右の三角で示した範囲を松永安左エ門は移動していたと見られる。

そもそもなぜ松永安左エ門が所沢～新座～志木周辺の土地を取得したかという、彼は東武鉄道創始者の根津嘉一郎（1860-1940）や新河岸川又引（現・志木）廻漕問屋16代目の井下田慶十郎（1865-1931）の熱心な志木開発に触発され、また武蔵野の雰囲気が入り広大な土地を取得したのだとされる。⁷⁾ 柳瀬荘の他、昭和12（1937）年に設立された東邦電力



写真① 柳瀬荘



写真② 地図（△柳瀬荘 ♥本学 下の●睡足居）

の研究施設として町内に東邦産業研究所が造営された。この東邦産業研究所は広大な敷地の中に、平行に並んだ研究棟・研究員の社宅が並び、社宅の庭も相当広かったと伝えられている。東邦産業研究所は終戦によって解散するが、研究員たちはサンケン電気（半導体事業）・シリコニット高熱工業（発熱体を利用した電気炉メーカー）へと繋がり、日本の科学技術に大きな貢献を果たした。研究員たちが理想とした農作業をしながら学ぶ学園建設はオーナーである松永安左エ門によって遮断された。

その結果、戦後慶應義塾獣医学産専門学校在学が川崎蟹ヶ谷から移転してきた際に松永安左エ門によって寄付され、昭和23（1948）年に慶應義塾農業高等学校、昭和32（1957）年に慶應義塾志木高等学校へとなった。（3,000坪）

また、慶應義塾が一部の土地を志木市へ寄付してスーパーダイエーがオープンした。（2014年に閉店）

2-2. 茶事

昭和9（1934）年諸戸清六⁸⁾から東京麹町別邸の茶会に初めて招かれる。

昭和10（1935）年61歳の年、熱海小雨荘に杉山茂丸・福沢桃介・山下亀三郎を招き茶事を行う。そこへ益田鈍翁が現われ、以降親交を結ぶ。この頃から本格的に茶道を始め、『論語』の「六十にして耳順う」にちなんで「耳庵」と号した。同年、柳瀬荘に根津青山（嘉一郎）を招き、初めての点前を披露する。また、原三溪（富太郎）らを招き、一年間で12回以上の茶事を行った。

昭和11（1936）年、柳瀬荘へ益田鈍翁や小林逸翁（一三）を招き茶事。また、益田の小田原掃雲台の扉蒔絵の茶会に原三溪とともに招かれる。以降、度々小田原を訪問する。この年は28回以上の茶事を行った。

昭和12（1937）年、熱海小雨荘に高橋箒庵（義雄）らを招き茶事。また、小田原掃雲台の朝の茶事に招かれ、鈍翁・箒庵・矢崎幻庵（広太）から明治大正の茶話を聞く。この一年間で38回以上の茶事があった。

昭和13（1938）年、柳瀬荘春草廬に平林寺大休禅師らを招く。この年、平林寺前に睡足居の竣工なる。『茶道三年』を刊行。

昭和14（1939）年、伊豆堂ヶ島に一日庵を建て、柳瀬荘に照月庵・自在軒（久木庵）が完成する。藤原暁雲（銀次郎）帰朝祝賀の茶会に畠山逸翁（一清）らと招かれる。この年は12回以上の茶事を行った。

昭和15（1940）年、箱根強羅の白雲洞を原家から譲り受ける。この年は26回以上の茶事があった。

昭和16（1941）年、東邦電力代表取締役を辞任し、取締役会長となる。

昭和17（1942）年、反対していた電力事業の国家統制にともない、東邦電力を解散。この年は8月までに32回以上の茶事があった。

昭和19（1944）年、70歳で『茶道春秋』を発行。

これ以降も松永耳庵はしばしば茶事を行い、その中で政財界人との交流を行った。

その茶風は「荒ぶる侘び」とも言われ、自伝でも次のような茶論を展開している。



写真③ 国立東京博物館「春草廬」

お茶とは生活の知恵を磨くものなんだ。お互いの日常生活は、できるだけ楽しく、できるだけ経済的に、これを合理化し、能率化し、よく調和しなければならぬ。苦の中に楽を、楽のなかに苦の対処を、次から次へと享受し、希求していかねばならぬ。日々是好日といった最上の生活でなければならぬ。⁹⁾

これらの文言を裏付けるように松永安太郎が次のように思い出を語っている。¹⁰⁾

十三才頃から師事していた福沢諭吉先生のお話を好くして呉れた。福沢先生は卑事多能と云う言葉が度々云われた。卑事多能とは、仕事には上下の差はない。下男や下女がやる様な仕事でも、お前さん達が知恵をつかってやれば下男下女達よりうまく出来る筈だ、と云う様な訳だ。大の福沢党である父は、エリート意識をもって、肉体労働をいとう人を、極端に嫌った。



写真④『芸術新潮』p.35より

このような考え方を基に、松永耳庵の「荒ぶる侘び」と呼ばれる独特な茶風が形成されたのだろう。彼は生涯茶の点前を身に付けることはなかった。点前は一応習ったものの「面倒だから」とすっかり忘れて自分流に点ててしまう。ときどきで点前の順序が変わるので「無勝手流かい？」と問われて「日々変わるから、毎日流さ」とうそぶく。時に古新聞の上にやかんを置いて、度肝を抜いた。このように手前勝手に茶を点てていたが、その茶はなかなか旨かったらしい。なによりも国宝級の道具に位負けすることはなかった。松永耳庵は形式に縛られた窮屈な茶道ではなく、互いに強い緊張を発散しつつ対面

する場面であるからこそ、茶室という狭くそぎ落とされた空間が必要であると考えたと思われる。そこには喫茶という単純な行動を、思想までに高めた千利休に通じる精神がある。

また、戦後物資不足の折、平林寺の老僧がジャガイモを皮付きのまますりつぶし、水に晒しているのを目撃した耳庵は、男手でも容易にできることを知って以来「蕨粉、吉野葛贅沢言わずにお菓子の材料に不自由しない」と言ったそうだ。¹¹⁾ このような切り替えの速さもまた型にとらわれない自由な精神の発露である。

2-3. 睡足居

松永安左エ門が新座野火止の平林寺前に土地を購入し、睡足居を構えた件について考察する。下記に示すように元々平林寺内に「睡足軒」があった。『平林寺史』中に該当する記述がみえる。

平林寺 7世石院祖菴(1603-1687)「睡足軒」を建てる
寛文3(1663)年 野火止へ

そして松永耳庵が平林寺前に土地を購入し別荘代わりの茶室を建てる際に「睡足居」と命名した(昭

和13年)。没後（昭和47年）平林寺に寄贈され、さらに新座市へ転贈された際に元々の名である「睡足軒」に戻った。平成14年に「睡足軒の森」として整備され、松永耳庵が移築して茶室として使っていた古民家「睡足軒」と平林寺の持ち物で座禅するための「紅葉亭」の建物、庭園（1万㎡）が開放されている。折々に市民による展示・演奏会・茶会などが催され、紅葉のシーズンにはライトアップされ新座市民はもとより近隣からの観光客を集めている。

この睡起居/睡足軒の名の由来について、現在下記2説がある。

白居易説：香炉峰下新卜山居 草堂初成偶題東壁 白居易

日高睡足猶慵起、小閣重衾不怕寒。
遺愛寺鐘欹枕聽、香鑪峯雪撥簾看。
匡廬便是逃名地、司馬仍爲送老官。
心泰身寧是歸處、故鄉可獨在長安。（部分）

蘇軾説：試院煎茶

蘇軾

蟹眼已過魚眼生、颼颼欲作松風鳴。
蒙茸出磨細珠落、眩轉遶甌飛雪輕。
銀瓶瀉湯誇第二、未識古人煎水意。
君不見昔時李生好客手自煎、貴從活火發新泉。
又不見今時潞公煎茶學西蜀、定州花瓷琢紅玉。
我今貧病常苦飢、分無玉碗捧蛾眉。
且學公家作茗飲、塲爐石銚行相隨。
不用撐腸拄腹文字五千卷、但願一甌常及睡足日高時。

一般的に言って、「睡足」は白居易（772-846）の詩を想起する。特に『枕草子』第299段で「香炉峰の雪」で名高く、多くの日本人は白居易が出典だと認識するだろう。しかし、蘇軾（1037-1101）の「試院煎茶」詩は題名通り茶を淹れる内容なので、こちらが出典ではないかという議論もある。

そこで、平林寺が仏教寺院であるということを考えると、仏教に帰依していた白居易作品を出典にしたと考えるのが妥当であろう。蘇軾の詩は白居易詩の間テキスト性（インターテクスチュアリティ）、いわゆる「典故」や「本歌取り」に相当すると考えられる。¹²⁾

また、睡足軒を睡起居とした理由は、おそらく平林寺に敬意を払って軒を居に換えたのだと推測される。



写真⑤ 睡足軒内で行われた
本学茶道部による茶会

2-4. 平林寺の墓所

松永安左エ門と平林寺との関係は深い。21世峯尾大休禅師との交流や、松永安左エ門が平林寺から賜わり、没後平林寺へ返された薬師堂及び如来像の存在¹³⁾、さらには故郷の壱岐と平林寺に分骨されたことなどからも分かる。

現在平林寺内に建っている墓石は、先に物故した妻の一子がやや古く、松永安左エ門のものは若干新しい。この墓石も生前から準備したものと考えられる。谷山之信氏によると、青山にある石勝に生前依頼したもので、裏側に小さな丸い苔石が置かれ生前の耳庵が「猫のお墓」だと言ったそう。松永安左エ門は一生涯鉄砲玉のように仕事一筋だったため家庭人としてはやや失格だったようで、妻の一子は寂しさを犬猫の飼育によって慰めていた。「猫のお墓」も実際に飼い猫の墓石代わりだったのを夫婦墓に添えたものではないか。さらに「生きながら猫のお墓に埋められて そらぞらしさの耳庵そもさん甚麼様」という狂歌を作ったとも伝えられている。



写真⑥ 平林寺に眠る松永夫妻

おわりに—松永安左エ門（耳庵）の新座時代の意義—

松永安左エ門の長い生涯は浮き沈みの激しいものだった。意気揚々と上京し念願の慶應義塾生として勉学に励んでいた折に、父の急死によって家督を継がざるを得なくなった。復学するものの、学問への情熱が冷め実業で活躍することを誓う。その実業界でも騙されたり火事に遭ったりと苦労を重ねる。徐々に実業界で頭角を現し政界へも進出したが、世界的に不安定な時代に翻弄される。自己の信念を全うしようとすればするほど戦争へと舵をきりつつあった国家と対立し、雌伏の時間を過さざるを得なかった。この雌伏時代に松永安左エ門は新座（所沢）～志木で隠棲しつつ、国家の為になる研究施設を造る。それが戦後日本の復興に大きな力となったことは間違いない。

松永安左エ門は戦時中、柳瀬荘で妻の親戚らとともに疎開生活を送っていた。精神的に平穏だったとは考えられないが、新座雌伏時代があってこそ最晩年の業績が生まれたのだと考えられる。また、新座時代は柳瀬荘や睡足居でゆったりと茶道を楽しむことが精神的な支えとなったことは間違いない。今でも新座の古老たちから「馬に乗った耳庵さん」¹⁴⁾「親しく声を掛けてくれた松永さん」という声を聞く。平林寺前で営業している「竹映」の元主人谷山之信氏も、結婚の報告をしたら「新婚旅行に強羅のうちの別荘へ行きなさい」と勧められたことをよく記憶していると語ってくれた。

戦後は母校慶應義塾へ土地を提供し、現在の慶應義塾志木高校へつなげた。校内に入っただけの場所に「松永安左エ門君像」と刻まれた胸像が建っている。松永安左エ門が戦後新座周辺の土地を譲り小田原へ移転したことによって、この周辺が恩恵を受けたこともまた事実である。

このように、松永安左エ門（耳庵）の新座時代は彼の人生の中で最も苦しく、最も茶道に向き合った時間だったし、次へのステップへ踏み出すために必要な場所でもあった。

最後に、本稿に戦時中柳瀬荘に疎開していた妻一子の親族へのインタビューと、松永安左エ門の嫡孫

である松永安彦氏への取材が時間の関係で盛り込めなかった。別の機会に原稿化したい。

松永安左エ門の新座時代をよく知る谷山之信氏の訃報を、公開講座終了後に谷山氏の旧友から耳にした。心からのお礼とご冥福をお祈り申し上げる次第である。

また、本稿で使用した写真は松永家当主である松永安一郎様より掲載のご許可を頂いた。感謝申し上げます。



写真⑦ 慶應義塾志木
高校にある胸像



写真⑧ 2016年7月9日に行われた公開講座

参考文献

- 松永安左エ門『松永安左エ門著作集』五月書房、1982年12月
 平林寺編『平林寺史』1987年9月（非売品）
 宇佐美省吾『人生の鬼 松永安左エ門』泰流社、1993年、9月
 福岡市美術館所蔵品目録『松永コレクション』1999年2月
 松永安左エ門『松永安左エ門』日本図書センター、1999年2月
 水木楊『爽やかなる熱情 電力王・松永安左エ門の生涯』日本経済新聞社、2000年12月
 『茶道雑誌』「特集 松永耳庵—没後三十年によせて—」河原書店、2001年8月
 『芸術新潮』「特集 最後の大茶人松永耳庵 荒ぶる佗び」新潮社、2002年2月
 小島直記『まかり通る 電力の鬼・松永安左エ門』東洋経済新報社、2003年、7月
 橘川武郎『松永安左エ門』ミネルヴァ書房、2004年11月

『三溪園100周年 原三溪の描いた風景』 神奈川新聞社、2006年 6 月

藤井孝文『平林寺』 平林寺、2009年 7 月

松永安左エ門『電力の鬼』 毎日ワNZ、2011年 9 月

新井恵美子『七十歳からの挑戦 電力の鬼 松永安左エ門』 北辰堂出版、2011年 9 月

逸翁美術館・福岡市美術館編『茶の湯交遊録 小林一三と松永安左エ門 逸翁と耳庵の名品コレクション』、思文閣出版、2013年10月

『なごみ』「特集 横浜と歩んだ近代数寄者 原三溪」 淡交社、2014年 8 月

池間里代子『新座歴史探訪Ⅱ―荒ぶる侘び 松永耳庵―』 2016年 3 月（パンフレット）

注

- 1) NHK 名古屋放送局制作、平成27年 9 月19日放映「鬼と呼ばれた男 松永安左エ門」
- 2) 年齢は数え年
- 3) 「電力の鬼」とは、戦後電力事業を民営化すること、電気料金の値上げを強行したことによって「鬼」というあだ名がついた
- 4) 松永安左エ門『電力の鬼』 毎日ワNZ、2011年 9 月 p.12
- 5) 東京国立博物館「柳瀬荘」パンフレットより
- 6) 平林寺門前「竹映」元主人谷山之信氏（1931－2016）の談
- 7) <http://shimin.camelianeto.com> 2016年 9 月27日アクセス
- 8) 二代目諸戸清六（1888－1969）、三重県桑名出身の初代山林王の四男
- 9) 前掲書 松永安左エ門『電力の鬼』 p.267
- 10) <http://www.sesshuukai.com>（昭和48年「雪州会だより」） 2016年 9 月28日アクセス、松永安左エ門には実子がいなかったため、弟の子である安太郎を相続人に指定していた
- 11) <https://www.toraya-group.co.jp/toraya/bunko/> 2016年 2 月10日アクセス
- 12) 間テキスト性（インターテクスチュアリティ）は「テキストの意味を他のテキストとの関連によって見つけだすこと」と定義される。詳細は拙稿『『紅樓夢』における唐寅の間テキスト性』『日中文学文化研究』第 6 号（査読中、掲載予定）を参照
- 13) 『平林寺史』1987年、pp.497-499によると、昭和55年春ごろに小田原から移されたとある
- 14) 『松永安左エ門著作集』第 1 巻、五月書房、1982年12月、p.443「馬の方ははだか馬から始まって埼玉県
の柳瀬に隠棲した戦時中まで続けた」